

姚合における「小吏文學」

——「武功縣中作三十首」を中心に——

二宮美那子

はじめに

「武功縣中作三十首」は、中晩唐の詩人姚合（七七七—八四二）の代表作と呼ぶべき長編連作である。五言律詩三十首から成るこの作品は縣主簿時代に作られ、その評判によって彼は後世に「姚武功」と稱される。赴任地を題に冠し縣吏生活を大量に綴るこの作品は、當時の士大夫が仕官と隱逸に對しどのような意識を持っていたかを探る、好個の材料と言える。姚合には他に、仕官と距離を置いた立場で綴られた、同じく五言律詩の連作「閑居遣懷十首」もあり注目される。本稿は、「武功縣中作」の作品分析や「閑居遣懷」との比較を通し、姚合が描いた小吏の世界はいかなるものであったか、またその「吏隱」（官吏と隱者の立場の兩立）の特徴はいかなるものであったかを考察し、當時の士大夫文學における仕隱のあり方の一端を探ることを目的とする。あわせて、これら姚合作品の背後にあった下級官僚特有の感情の廣がりについても論じたい。

一、「武功縣」という空間

始めに、作品中に「武功縣」がどのような詩空間として描かれているか確認したい。「武功縣中作」は官にありながら隱逸を體現する生き方を描くものだが、このような作品においては、自己のいる場を描くこと即ち自己を描くことであり、空間の描寫は重要な意味を持つ。連作三十首の冒頭はこのように始められる。

縣去帝城遠	縣	帝城を去ること遠く
爲官與隱齊	官爲 ^た るは	隱と齊 ^{ひと} し
馬隨山鹿放	馬は山鹿に	隨ひて放たれ
雞雜野禽棲	雞は野禽に	雜りて棲む
遶舍唯藤架	舍を遶るは	唯だ藤架
侵階是藥畦	階を侵すは	是れ藥畦
更師愁叔夜	更に愁叔夜を	師とし
不擬作書題	書題を作るを	擬せず

この縣は都から遠く離れ、官吏であっても隱者に等しい。馬は野生の鹿と共に放たれ、鶏は野鳥と雜居する。官舎を繞るのは藤蔓、階をこ

えて伸びるのは薬圃。ここに在る私は、その上あの嵇康に倣って書類
さえ書こうとしない——連作其一では武功縣をこのように描寫する。
首聯では、中央から離れていること、故に官にありつつ隱逸を同時に
遂げられることを言う。家畜や官舎が周圍の自然に混ざり埋もれる情
景を描寫する中間部は、武功縣が自然（隱）の中にあることの強調と
なっている。尾聯は怠惰で世間と相容れない自己を言い、名利と外れ
た場所に自らを置く態度を明白に示す。尾聯に表される一種の職務放
棄は、第二章で考察する連作全體を覆う官を厭う態度と呼應している。
連作には配列が異なるテキストも存在したようだが、第一首目は動か
ず、この作品が全体を見渡す總序としての役割を擔っていたことが分
かる。

第一首目はこのように、都から離れた場所での勤めは隱と齊しい、
と言ふ言葉から始まった。實際の武功縣は長安を西に去ること約八十
キロ、決して都から遠くはない。そのことについてはまた後に觸れる
として、ここでは都から離れることを隱逸の實現と捉える發想・表現
に注目したい。地方勤めは祿（仕官）と隱逸を同時に實現できるとす
る表現は、夙に南齊の謝朓「之宣城出新林浦向版橋（宣城に之くに新
林浦を出て版橋に向かふ）」詩（『文選』卷二十七）「既懼懷祿情、復協
滄州趣（既に祿を懷ふの情を懼はしめ、復た滄州の趣に協ふ）」の例
がある。謝朓のこの作品には、地方への赴任を隱と見なすことによつ
て、自らを慰撫する趣きがある。下って唐代には、地方に赴任する相
手を送別する作品の中に、姚合詩と類似の表現が見られる。獨孤及
（七二五—七七七）の「送陽翟張主簿之任（陽翟張主簿の任に之くを
送る）」詩である。

舊聞陽翟縣 舊聞く 陽翟縣

姚合における「小吏文學」

西接鳳高山 西のかた鳳高山に接すと
作吏同山隱 吏と作るは山隱に同じきも
知君處劇閒 君の劇閒に處るを知る
陽翟縣は洛陽東南の畿縣。山に接するといふ地理條件から「山隱」と
いう言葉を導いている。作品は、隱者に等しいと雖も激務にあるのだ
ろう、と相手を思いやるものだが、發想や句作りが姚合詩と近い。赤
井益久氏「中唐における「吏隱」について」は、「吏隱」の發想を支
えるものとしてこの作品を引用し、更に唐の大曆期には、地方の縣單
位の「令」「主簿」「尉」に赴任する者への送別詩で、赴任先が隱逸に
相應しい土地と慰める際に「吏隱」を用いる例が多い、と指摘されて
いる。

姚合のこの冒頭の句にも、地方縣吏に隱と捉える發想が用いられて
いる。これは仕官と隱逸が同時に實現されたことを詠うもので、以上
の作品の流れを受けるならば、實際の心理は措くとして肯定的に表現
されるべき立場である。ところが姚合は、武功縣は邊鄙で荒涼とした
場所と繰り返し強調する。以下、再び作品に戻って、武功縣がどのよ
うに描かれているか確認を続けよう。

縣僻仍牢落 縣 僻にして仍ほ牢落たり

遊人到便迴 遊人 到りて便ち迴る

路當邊地去 路は邊地に當たりて去り

村入郭門來 村は郭門に入りて來たる

微官從似客 微官 客に似るに從す

遠縣豈勝村 遠縣 豈に村に勝らんや

微官從似客 微官 客に似るに從す

遠縣豈勝村 遠縣 豈に村に勝らんや

（其十一）

作吏荒城裏 吏と作る荒城の裏
窮愁欲不勝 窮愁 勝へざらんと欲す

(其十四)

以上の例に見えるように、作品は「吏隱」思想の流れを汲むものではないが、そこから世俗の塵埃を免れた喜びに向かう譯ではなく、あくまで邊鄙な場所の下級官僚である我とその悲哀とを強調するのである。さて、これらの表現と現實との懸隔は、先行研究に既に指摘される所である。武功縣は、現實には長安近郊の上級縣(畿縣)であり、その主簿は出世コースの一環と見なされていた。つまりこの時の姚合は、自身の境遇を悲觀すべき立場にはなかつたと考えられる。しかしだからと言って、詩の表現と現實との矛盾を指摘する必要はないだろう。姚合は「縣の小吏」としての世界を描き出すためにこのような表現を選んだのであり、その背景には、第三章で詳しく觸れるように、先行する文學の型も存在していた。

「武功縣中作」第一首の冒頭は、都との「距離」から隱を導くものであった。そこで次に、唐代の士大夫が中央と周縁との距離をいかに敏感に捉えていたかを、先行する作品を例に挙げて見ていきたい。都と赴任地との距離を、自身の官界での位置も絡めて詠う表現には、遡れば西晉の潘岳が河陽令に出された際の「河陽縣作」其一(『文選』卷二六)「誰謂晉京遠、室邇身實遠(誰か謂はん晉京遠きと、室邇きも身實に遠かなり)」の例がある。これは、都への距離的な近きと、自身の中官への遠さを對比することによって、我が身の不遇を嘆くものである。同様の嘆きは、姚合と近い時代の王建(七六六?)の詩にも見られる。都にほど近い昭應縣にて縣丞となった王建が、友人張籍に送ったとされる作品一首である。

歸昭應留別城中 昭應に歸るに城中に留別す
喜得近京城 京城に近づき得たるを喜び
官卑意亦榮 官卑しきも 意亦た榮とす
竝牀歡未定 牀を竝べて歡び未だ定まらず
離室思還生 室を離れて思ひ還た生ず
計拙偷閑住 計拙にして閑を偷みて住み
經過買日行 經過 日を買ひて行ふ
知無自來分 自ら來たるの分無きを知れば
一驛是遙程 一驛は是れ遙程

寄廣文張博士 廣文張博士に寄す

春明門外作卑官 春明門外 卑官と作り

病友經年不得看 病友 年を経るも看るを得ず

莫道長安近於日 道ふ莫かれ長安 日より近しと

昇天卻易到城難 天に昇るは卻つて易きも城に到るは難し

一首目は、長安から昭應縣に歸る際の作品。昭應縣での勤めは官位は低くとも都に近くて光榮だと始まり、しかし長安に勤める機會が無いのを承知している以上、たった一驛(三十里)の距離でも遠いのだと、と締めくくる。二首目では、春明門(長安の外壁の門)外というすぐ近くにいるのに、卑官に就く身では病の友人を見舞うこともできない。「太陽より近い」と言われた長安だが、自分には天よりも都に行く方が遙かに難しい、と言う。これらの友人と會うことがままならないと嘆く表現の背景には、都を特別な場所と捉える當時の感覚がくっきりと反映されており興味深い。實際の昭應縣は京兆府に屬する次赤縣であり、科擧出身でもない王建にとって、そこでの縣丞という

職は決して悪いものではなかったはずだ。しかしそのような實際の背景はひとまず措いて、作者にとってはやはり「長安は遙か遠く、縣丞という職は卑しい」ものだった。

このような嘆きもまた、「吏隱」と同様、官僚獨特の敘情として繼承されて来たのだろう。もちろん、時代を隔てた潘岳の不遇感や、時代は近くとも科擧出身でない王建の感覺と、ここでの姚合を單純に並べることは出来ない。しかし、官界での前途がどうであったとしても、詩の上では「地方」（中央ではない）の縣吏は卑しきもの、都は遠きものであり、姚合はそのような型によって「武功縣中作」を構想したであろうことが指摘できる。

さて、それでは作品中の「武功縣」がひたすら暗い雰圍氣に覆われているかと言うとそうではなく、穩やかで温かみのある空間が登場することに注意を拂うべきであろう。以下に其九と其十八を引用する。

鄰里皆相愛	鄰里 皆な相ひ愛し
門開數見過	門を開けば數しば過ぎらる
秋涼送客遠	秋涼しくして客を送ること遠く
夜靜詠詩多	夜靜かにして詩を詠むこと多し
就架題書日	架に就きて書目に題し
尋欄記藥窠	欄を尋ねて藥窠を記す
到官無別事	官に到りて別事無く
種得滿庭莎	種え得たり滿庭の莎
閉門風雨裏	門を閉ざす 風雨の裏
落葉與階齊	落葉 階と齊し
野客嫌杯小	野客 杯の小さを嫌ひ

姚合における「小吏文學」

山翁喜枕低	山翁 枕の低きを喜ぶ
聽琴知道性	琴を聽きて道性を知り
尋藥得詩題	藥を尋ねて詩題を得
誰更能騎馬	誰か更に能く馬に騎らん
閑行祇杖藜	閑行 祇だ藜を杖とす

二例はいずれも、生活の細部の描寫を積み重ねることによりその充實を描く。登場する人々は皆自在に日常生活を楽しみ、そこに愁いの影はない。武功縣の詩空間は邊鄙で荒涼たるものとされる一方で、これらの穩やかで充足した個人の空間も描かれる。連作にはこのように様々な雰圍氣の作品があり、「武功縣中作」の空間を多彩なものにしている。

章の最後に詩體の問題にも簡單に觸れておきたい。作品は小吏としての現状への不滿を繰り返すが、詩形の上では對偶の整った五言律詩に落ち着いている。安定した詩形で連ねられる作品は、個人の眞情の吐露と言うよりは、幅廣く外部を意識した社交的な面を、より強く持っていると考えられる。これも作品の性質を考える際に看過できない点であろう。

二、官と隱

前章に引用した「架に就きて書目に題し、欄を尋ねて藥窠を記す」（其九）、「野客 杯の小さを嫌ひ、山翁 枕の低きを喜ぶ」（其十八）などの日々の情景を細やかに描く筆致は、作品の大きな特徴の一つである。同様の例として、他に其二十一が挙げられる。

假日多無事	假日 多く事無し
誰知我獨忙	誰か知らん 我獨り忙しきを

移山入縣宅 山を移して縣宅に入れ
 種竹上城牆 竹を種えて城牆に上らしむ
 驚蝶遺花蕊 驚蝶 花蕊を遺し
 遊蜂帶蜜香 遊蜂 蜜香を帶ぶ
 唯愁明早出 唯だ愁ふ 明早出でて
 端坐吏人勞 吏人の旁に端坐するを

まず、休日と言えば暇なものだが、私一人が忙しい、と言ふ發想の轉換が注目される。造園行爲を量感と勢いを伴った表現で捉える領聯、蝶や蜂を微細な目で捉えた頸聯では、表現の新鮮さが際立っている。詩は休日^⑫に忙しく立ち働く活氣ある描寫で始まるが、尾聯で明朝の現實を愁うことで、その楽しい雰圍氣は一氣に萎んでしまう。作品には、「假日」の「獨忙」が官という枠組みの中の私的樂しみであることがはっきりと示され、その枠の中でつぶさな觀察眼が發揮されるのである。充實した休日と翌日に控える現實との落差が、作品構成の要となっている。仕官と言ふ現實を厭い、對抗するものとして私に隱を強く構圖、あるいはより直接的な官吏生活への不滿の表出は、作品に繰り返し登場する重要なモチーフである。第二章では、このような官と隱のあり方と、その拮抗に注目していきたい。

(一) 官を厭う

連作中には、官には觸れずに隱逸世界のみを描く作品もあれば、隱逸に惹かれながらも現實に止まる態度を詠う作品もある。隱逸に對する距離が揺れること自體は、このような連作の中にあっても決して特殊なことではないだろう。作品の特徴として注目すべきは、隱逸への希求と對照される「官」のあり方である。まず次の例(其三)を見て

みよう。

微官如馬足 微官 馬足の如く
 只是在泥塵 只だ是れ泥塵に在り
 到處貧隨我 到處 貧 我に隨ひ
 終年老趁人 終年 老い 人を趁ふ
 簿書銷眼力 簿書 眼力を銷し
 盃酒耗心神 盃酒 心神を耗す
 早作歸休計 早に歸休の計を作し
 深居養此身 深居して此の身を養はん

ここに描かれるのは、貧しさ、老い、書類に酒、周圍にあるもの全てに追い立てられ消耗させられる小吏の姿である。馬の足(「馬」ですらなく)のようにひたすら泥塵の中をはいずりまわる、という首聯の比喩は、強い嫌惡感を表して殊に注意を引きつける。この比喩は連作三十首の中にあっても際立って強烈なものだが、この他にも小吏としての心勞、仕事への嫌惡を訴える表現は多くあり、連作の大きな特徴となっている。例えば其二十三の首聯。

一官無限日 一官 無限の日
 愁悶欲何如 愁悶 何如せんと欲す

「一官」は唐詩常用の語、ここでははしががない一官吏、と言ふほどの意味だろう。それが「無限日」、つまり果てしなく續くと嘆く。嫌なことほど長く感じるというのは人間共通の感情と言えようが、ここでは「無限」とそれを大げさに嘆いて見せている。また其十五では、

誰念東山客 誰か念はん 東山の客の
 栖栖守印床 栖栖として印床を守ると
 何年得事盡 何れの年にか事の盡きるを得ん

終日逐人忙 終日 人の忙しきを逐ふ

醉臥唯知叫 醉臥 唯だ叫ぶを知り

閑書不著行 閑書 行に著かず

人間長檢束 人間 長へに檢束

與此豈相當 此れと豈に相ひ當たらんや

作品は隱者である自分（東山客）がこのように印床（印章などを置く道具）から片時も離れずにいるとは、という嘆きから始まる。いつ終わるか知れない仕事やあくせくと人に従うばかりの日常への嫌悪、うまく世間に合わせられない自己を嘆き、最後には放棄とも諦めともされる思いを表白する。尾聯の世と相容れないという嘆きが、小吏としての日常の苦痛から導き出されている點も注目される。以上引用した例は、現状になじまず消耗していく自己を言い、厭うべき現實が延々と續くことをぼやきにも似た口吻で嘆いている。

これらの作品に見られる、仕官を厭いそこから隱逸を希求するという構造自體は、特に目新しいものではない。ここで注目すべきは、職務への嫌悪を様々に繰り返すことによって、小吏の文學として獨特の世界を築いている點である。隱逸へと向かわせるのが、節度や無欲、世俗への嫌悪といった「高尚」なものではなく、日常・現状への不満や苦痛という感覺的で卑近なものである、と言うのも大きな特徴と言えよう。

また、姚合獨自の工夫としてもう一つ指摘すべきなのが、其十五の「印床」のように、役所で用いる語彙、或いは道具を多く登場させ、役所勤めとその周邊を具體的に描き出す點である。其十五の「東山客」が「印床」を守る、という表現は、隱逸の世界と卑近な現實とをじかに結びつける。同様の例は其十七にも見られる。

簿籍誰能問 簿籍 誰か能く問はん

風寒趁早眠 風寒くして早きに趁じて眠る

每旬常乞假 旬毎に常に暇を乞い

隔月探支錢 月を隔てて錢を探支す

還往嫌詩僻 還往 詩の僻なるを嫌ひ

親情怪酒顛 親情 酒の顛なるを怪しむ

謀身須上計 身を謀るに上計を須つも

終久是歸田 終久 是れ歸田せん

「簿籍」は唐詩の使用例が少ない語で、戸籍帳簿の類を指すか。作品は帳簿を問い質す者などであろうか、寒いから早く寝てしまおう、という職務放棄から始まる。續いて十日に一度の暇乞いを缺かさず、隔月で給料を前借りすると言う、作品中にしばしば見られる懶吏の形象が描かれる。尾聯は、身の振り方には「上計」を待つものの、最終的には歸隱しよう、と終わる。「上計」は漢代の「上計吏」（郡國の一年間の出納・人口・獄訟などを朝廷に報告する使い、唐代の「朝集使」に相當する）から來る言葉。この作品では休暇や給料といった役人の日常に言及し、更に「簿籍」「上計」と言う語彙を用いることで、その生態を活寫している。

他にも、「一日看除目、終年損道心（一日 除目を看れば、終年道心を損なふ）」（其八）の「除目（役人を任命する際の名簿）」、「愛閑求病假、因醉棄官方（閑を愛して病假を求め、醉に因りて官方を棄つ）」（其七）の「官方（官文書）」、「印朱沾墨硯、戶籍 雜經書（印朱 墨硯に沾され、戶籍 經書に雜ふ）」（其二十九）の「印朱」や「戶籍」など、役所や任期にまつわる用語を多用するのは、姚合独自の工夫として注目すべきであろう。これらの表現によって、小吏の日

常はより具體的に讀者の眼前に現出する。またこれらの用語は、時に職務への嫌悪やその放棄に結びつき、時に隱逸の空間に配されて、小吏生活と隱逸の世界を地続きにする。これらの道具立てによって、小吏としての現實が存在感を持つと同時に、日常に取り込まれた形での隱逸世界が描かれるのである。

一方で、このような日常レベルでの隱から更に一步進んだ、美しい「夢」としての隱逸世界を描くものもある。ここでは役所勤めにまつわる道具が、逃れるべからざる現實の重石として働いている（其二十八）。

長憶青山下 長く憶ふ 青山の下に

深居遂性情 深居して性情を遂げんことを

壘階溪石淨 階に壘なりて溪石淨く

燒竹竈烟輕 竹を燒きて竈烟輕し

點筆圖雲勢 筆を點じて雲勢を圖き

彈琴學鳥聲 琴を弾きて鳥聲に學ぶ

今朝知縣印 今朝 知縣の印

夢裏百憂生 夢裏 百憂生ず

首聯の「青山」は隱逸世界の象徴。「遂性情」は人が本來もっている性質に従うこと。續く二聯では青山の下での暮らしが夢想される。清らかな環境と風雅な暮らし、理想の生活が詠われた後の尾聯は、朝になって「知縣印」を目にし、夢の中に憂いが湧き起こる、と終わる。「知縣印」は縣行政に関わる者が持つ印章であり、縣吏の象徴として用いられている。作品は、想像上の隱逸生活が描かれる中間部分に描寫の重點が置かれ、だからこそ現實との落差を言う全體の構造が際立つたものとなっている。そしてその落差を引き起こすきっかけとして、

「知縣印」が非常に效果的に配されているのである。

因みに、姚合の應酬詩にも例えば「故人爲吏隱、高臥簿書間（故人吏隱を爲し、簿書の間に高臥す）」（寄永樂長官殷堯藩）、「簿書嵐色裏、鼓角水聲中（簿書 嵐色の裏、鼓角 水聲の中）」（金州書事寄山中舊友）のように類似の表現が見られる。役所にまつわる語彙を用いた表現は姚合得意のものであり、自身の文學の特徴として自覺があったのだろう。

(二)「閑居遣懷十首」との比較―「青山」を中心として

この節では、姚合のもう一つの連作「閑居遣懷十首」と「武功縣中作」の比較を通し、作品に描かれる隱逸表現の特徴を明らかにしたい。「武功縣中作」が官という枠組みを持つのに對し、五言律詩十首からなる「閑居遣懷」は一貫して仕官と距離を置いた立場から描かれており、兩者には明確な構想の違いが見られる。同じ作者によるこの異なる二作品を比較することによって、作品の性格や表現の意圖を、よりはっきりと捉えることが出来るだろう。

作品分析の前に、連作の題になっている「閑居」について簡単に觸れておきたい。赤井益久氏の研究が指摘するように、「閑居」は唐代士大夫の處世觀を考える際に重要な概念の一つである。赤井氏によると、「閑居」の語を作品に多く用い、「出仕」に拮抗するだけの「退隱」の場を創出したのが陶淵明であった。その精神は中唐の韋應物に至って更なる展開を見る。生涯に出仕と棄官を繰り返した韋應物は、出仕の場である官舎にあっての「閑居」＝退隱の心持ちを詠い、退隱の本質とは精神のあり方にあると明示した。韋應物の處世觀を意識して、閑居に新たな意味づけをしたのが白居易である。白居易は、官人生活

の初期から、心の持ち方次第で現出する「閑居」、處世觀の對立をこえた「閑居」を詠った。

姚合にも、この十首の連作の他、「閑居」を題に冠する作品が八首殘されており注目される。「閑居遣懷」は制作年代を同定できないものの、「青雲非失路、白髮未相干（青雲 路を失ふに非ず、白髮 未だ相ひ干さず）」（其六）といった表現から、官職に就いていなくともある程度餘裕があり、また初期に屬する作品と推測される。作品の詳しい背景は不明なものの、精神的充足感がある穏やかな「閑居」を描く點では、白居易と共通している。

さて、まず「閑居遣懷」の特徴を簡単に確認したい。連作第一首目にはこのようにある。

身外無徭役 身外 徭役無く
開門百事閑 門を開きて百事閑かなり
倚松聽唳鶴 松に倚りて唳鶴を聽き
策杖望秋山 杖を策して秋山を望む
萍任蓮花綠 萍は蓮花に任せて綠なり
苔從匝地斑 苔は匝地に從ひて斑なり
料無車馬客 料るに車馬の客無くんば
何必掃柴關 何ぞ必ずしも柴關を掃かん

作品は、自分には何も強いられる仕事がなく、扉を外へ開いても萬事のどかなものだ、と始まる。中間部には周囲の風景とそれを悠然と樂しむ自身の姿が描かれ、馬車で乗り付けるような客もいなかろう、と結ばれる。このように、作品には自身と世間との距離、同時に世間に囚われない自己であることが示される。そしてその距離とは、拒絶や隔離によって生み出される尖鋭なものではなく、「門を開」いていて

も實現できる、開放的で餘裕あるものなのだ。また、この連作には、「武功縣中作」と同じく日常の動作を具體的に描く表現が多く見られるが、穏やかな「閑居」の中におかれたそれらは、永遠に續くかのよくな悠々たる時空間を生み出している。次に擧げるのは連作其三である。

白日逍遙過 白日 逍遙として過ぐ
看山復繞池 山を看て復た池を繞る
展書尋古事 書を展きて古事を尋ね
翻卷改新詩 卷を翻して新詩を改む
除酒風前酌 酒を除りて風前に酌み
留僧竹裏棋 僧を留めて竹裏に棋す
同人笑相問 同人 笑ひて相ひ問ひ
羨我足閑時 我の閑時足るを羨む

氣ままに一日を過ごし、山を見てまた池の邊を歩く。本を讀んで古に觸れ、卷子を繰って詩を推敲する。酒を買っては風の中で酌み、僧侶を引き留めては竹林で碁を打つ。日常の一つ一つを書き留めた表現の中に、穏やかで、故にいつまでも續くようなゆったりとした時間が流れている。このような平和で満ち足りた空間が、「閑居遣懷」詩の大きな特徴の一つとなっている。そして、それは「武功縣中作」の、あらゆる「事」が自分に向かって押し寄せてくると言う忙しない世界——「曉鐘驚睡覺、事事便相關。小市柴薪貴、貧家砧杵閑（曉鐘 睡覺を驚かせば、事事 便ち相ひ關はる。小市 柴薪貴く、貧家 砧杵閑かなり）」（其五）——とは、一線を畫していると言えよう。但し、既に第一章の最後に述べたように、「武功縣中作」にも温かく穏やかな空間は描かれている。このように見ると、「武功縣中作」が小吏生活

と言う枠組みをもちつつ多様な世界を描くのに對し、「閑居遣懷」は一貫して官のしがらみが無い穩やかで餘裕ある空間を描くもの、と言うことが出来る。

さて、ここで取り上げたいのは「青山」を繞る表現である。既に引用した「武功縣中作」其二十八には、「長憶青山下、深居遂性情（長く憶ふ青山の下に、深居して性情を遂げんことを）」と言う表現があった。この作品は「性情を遂げる」ための理想の空間として「青山」を夢想し、最後には「知縣印」によって現實に引き戻される、と言うものだった。「武功縣中作」にはこのように、隱逸を夢見ながらも小吏としての日常に歸る、という構圖がしばしば見られるが、そこで度々登場するのが、歸る場所である「山」である。例えば其二十二、

門外青山路 門外 青山の路

因循自不歸 因循して自ら歸らず

養生宜縣僻 生を養ふに縣の僻なるは宜しく

說品喜官微 品を説くに官の微なるを喜ぶ

淨愛山僧飯 淨くして愛す 山僧の飯

閑披野客衣 閑ろに披る 野客の衣

誰看幽谷鳥 誰か看ん 幽谷の鳥の

不解入城飛 城に入りて飛ぶを解くせざるを

門の外、と言うのは、具體的には役所の外、つまりは今自分が屬している世界の外、と捉えられる。そこには青山に續く道が續いているが、自分は躊躇して歸らない。「因循」はぐずぐずとその場に留まってしまふこと。白居易「和微之詩二十三首」の「和櫛沐寄道友（櫛沐道友に寄するに和す）」(2232)に「由來朝廷士、一入多不還。因循擲白日、積漸凋朱顏（由來朝廷の士、一たび入りて多く還らず。因循して

白日を擲ち、積漸 朱顏を凋ましむ）」とあるのと同じく、一度官に就けばそこに止まって「歸る」機を逸し續けていることを形容する。末尾は幽谷の鳥に自己を重ねる。冒頭で山に歸らないと言い、末尾で城（都市）に入つてうまく飛べないと言う背景には、官を放擲する完全な隱逸と中央での仕官、そのいずれにも向かつていない現在がある。そしてこの二つに挟まれて、隱逸に相應しいものとして僻縣での今が描寫される。つまり作品は、二つの価値感の狭間で結局は「遠縣」での小吏に収まり、そこで隱逸の氣分を味わうという今を描いているのである。更に其二十九では、

自知狂僻性 自ら知る 狂僻の性

吏事固相疏 吏事 固より相ひ疏なり

祇是看山立 祇だ是れ山を看て立ち

無因出縣居 縣を出て居るに因し無し

印朱沾墨硯 印朱 墨硯に沾され

戶籍雜經書 戶籍 經書に雜ふ

月俸尋常請 月俸 尋常に請ふも

無妨乏斗儲 無妨だ斗儲に乏し

「狂僻」は世と相容れない奇矯さ、風變わりな性質。次に引用する「閑居遣懷」其十の「拙直」と同様、自身を從來の價值觀に反する立場に置くことよって、その枠組みから脱する表現。この詩では、役人の職務には向かない自分だが、目の前に歸るべき山を見つても、縣を出るきっかけもないと言う。續いて「印朱」「戶籍」という役所仕事の道具が、「墨硯」「經書」と混在している書齋の有様が描寫されている。

以上に擧げた其二十一、其二十九からは、役所勤めと相容れない自

らの性を言い、歸るべき場所を目の前に見つとも、結局今の世界から離脱しない、という共通した構圖が讀み取れる。また、自身の官が隱者たるに相應しいと言ひ、官にありながらの隱逸體驗を詠う表現（其二十二中間部）と、官と隱がまじり合つた空間を描く表現（其二十九頸聯）は、今いる場所に隱逸の實現を見る點で共通している。これらの表現の背景には、「小吏としてある現實」に對する意識を窺うことができる。つまり官を辭められず、また辭める筈もない實際がある一方で、官を放擲した自由な隱逸世界（青山）も意識される。その狭間で、隱に相應しい小吏・懶吏としての自己を強調し、官と隱が混在する世界を描くのだ。一方、「閑居遣懷」の山はどのように描かれているか。其十を引用する。

拙直難和洽　拙直にして和洽し難く
從人笑掩關　人の關を掩ふを笑ふに従す
不能行戶外　戶外に行く能はざるに
寧解走塵間　寧くんぞ解く塵間に走かんや
被酒長酣思　酒を被りて長く思ひを酣にし
無愁可上顏　愁ひの顏に上す可き無し
何言歸去事　何ぞ言はん　歸去の事

著處是青山　著る處　是れ青山
世間と相容れない自己を描く點では共通するが、門を閉ざして閉じこもることを是とし、またそれを是と出来る餘裕が作品全體に感じられる。尾聯では「歸る」など殊更に言わない、いる場所が即ち「青山」なのだから、と言ふ。「武功縣中作」では目の前にあるのに歸れない「山」が描かれるのに對して、ここでは殊更に場所に拘る必要がないという態度がとられる。つまり姚合は、官に在る時は「歸れない山」

に對峙して嘆息し、一方で閑居して満ち足りている時は、青山＝隱逸の「場」に拘る必要はないと言ふのである。二つの立場が「青山」を間に挟んで鮮やかに對比されている。

二つの表現の差異には、姚合が實際に置かれた狀況が影響していると考えられる。既に述べたように、「武功縣中作」の青山には、縣吏という身分を嫌惡しつつも、官を放棄しないという實際が反映されている。一方「閑居遣懷」においては、もしこの時姚合が不遇であったならば、場所に拘らない餘裕ある態度を詠うことは出来なかつただろう。二つの表現を比較すると、文學の上での「隱逸」が柔軟に變化し、また姚合が、現實を巧みに映しつつこれらの作品を創作したことが讀み取れる。

この二つの描かれ方によって、姚合の隱逸觀が變化した、或いは矛盾があった、などと言ふ必要は全くないだろう。また、不満と歸隱願望を言うからと言つて、官途が閉ざされていた、不遇にあつたと單純に理解することが出来ないのは、「武功縣中作」を見れば明らかである。作品には、それを書く際に置かれた狀況や、或いは作品のテーマや意圖——それは詩人個人が決めるものではなく、これまでの文學の傳統が當然影響する——によって、ある程度の「型」があらかじめ準備されている。そこに個人の創意や時代精神が加わり、新たな作品が累積されていく。仕官と隱逸というのは中國古典文學の一大命題であり、ためらいつつ兩者の間を行き來するのは、士大夫文學の普遍的な傾向と言へる。姚合のこれらの連作は、唐代の士大夫がこの矛盾する命題といかに付き合ひ、それを文學に表現したかを考えるための、興味深い事例であると言える。

三、「小吏文學」の廣がり

ここまでは「武功縣中作」の特徴を見てきた。この章では、「武功縣中作」の背景に、「小吏文學」とも呼べるような作品が廣く存在することを確認していききたい。例えば高適（七〇〇？—七六五）が封丘縣尉だった時の作品に、このようなものがある。

封丘縣 封丘縣

我本漁樵孟諸野

我れ 本 孟諸の野に漁樵たり

一生自是悠悠者

一生 自ら是れ悠悠たる者なり

乍可狂歌草澤中

乍だ草澤の中に狂歌すべきのみ

寧堪作吏風塵下

寧くんぞ風塵の下に吏と作るに堪へんや

祇言小邑無所爲

祇だ言ふ小邑 爲す所無しと

公門百事皆有期

公門 百事 皆な期有り

拜迎官長心欲碎

官長を拜迎すれば心碎けんと欲す

鞭撻黎庶令人悲

黎庶を鞭撻すれば人をして悲しましむ

歸來向家問妻子

歸り來たりて家に向かひて妻子に問へば

舉家盡笑今如此

家を舉げて盡く笑ふ 今此の如しと

生事應須南畝田

生事 應に須らく南畝の田たるべし

世情付與東流水

世情 付して東流の水と與にす

夢想舊山安在哉

夢に舊山を想ふも安くにか在らんや

爲銜君命日遲迴

爲に君命を銜みて日び遲迴す

乃知梅福徒爲爾

乃ち知る 梅福 徒に爾を爲すを

轉憶陶潛歸去來

轉た憶ふ 陶潛の歸去來

冒頭、自身は孟諸（河南省商丘、高適が出仕前に寓居した場所）の漁師や樵のようなもので、悠々と一生を送るはずであった。原野澤畔で

恣に歌うことはできても、浮世で吏となるのに堪えられようか——と今の境遇を慨嘆する。七言の歌謠のリズムが、囚われの「漁樵」の放歌として効果的に用いられている。續いて役所勤めの心勞を、仕事の期限、上司へのおべっか、庶民への刑罰……と並べる。家人も同情してくれず現状を抜け出したい氣持ちは募るばかり。しかし自分が歸る場所はどこにもなく、日々命令に従って右往左往。最終聯の「梅福」は漢代の人、南昌縣尉を勤め、職を辭して後に仙人になったと言われる人物。縣尉となったのは空しい仕業とようやく分かった、陶潛が「歸去來」を詠って歸田したことが思い出される、と作品は結ばれている。

獨白にも似たこの作品を、詩形も異なる「武功縣中作」と單純に並べることは出来ない。しかし、赴任地を題名に冠して縣吏暮らしを描く點、また縣吏暮らしを嫌惡すべき現實として描き、そこからの脱却を志向するが果たしきれず嘆くと言う構圖は重なる。高適には他にも「封丘作」「初至封丘作」があり、地方の小官として宦遊を餘儀なくされる身の上や役人暮らしを嘆いている。

更に、中唐の王建にはこのような作品がある。

昭應官舍

昭應の官舍

癡頑終日羨人閑

癡頑にして終日人の閑なるを羨み

卻喜因官得近山

卻って喜ぶ官に因りて山に近きを得るを

斜對寺樓分寂寂

斜めに寺樓に對して寂寂たるを分かち

遠從溪路借潺潺

遠く溪路從り潺潺たるを借る

眇身多病唯親藥

眇身 病多くして唯だ藥に親しみ

空院無錢不要關

空院 錢無くして關すを要めず

文案把來看未會

文案 把り來りて看るも未だ會さず

雖書一字甚慙顏 一字を書すと雖も甚だ慙顔す

王建が昭應縣丞であった頃の作品である。首聯で癡頑にして閑を羨むと言うのは、世間一般の官吏は職務に勵み忙しいのを喜ぶものだろう、と言うのを反轉させる。二句目の「卻喜」というのも同じく、普通は田舎に來たと嫌がる所だろうが、という含みをもつ。二句目の「因官」、或いは領聯の「分」「借」などの語には、小吏であること、官舎に居ることを逆手に取って隱逸的雰圍氣を味わうような態度が見られる。

表現の差異はもちろんあるものの、詩題に縣名を冠し、そこでの無能な小吏暮らしを描くという全體の流れは姚合作品と同じである。また、都にごく近い昭應縣を隱逸に相應しい場と捉える點、自身を徹底して役人に不適格な者として描く點なども共通する。全體として、高適詩より一層「武功縣中作」に近い内容となっている。また、白居易も縣吏時代に以下のような作品を作っている。

權攝昭應早秋書事寄元拾遺兼呈李司錄 [0394]
權攝昭應たりて 早秋 事を書して元拾遺に寄せ 兼ねて
李司錄に呈す

……
到官來十日 官に到りて來たること十日

覽鏡生二毛 鏡を覽れば二毛生ず

可憐趨走吏 憐れむべし趨走の吏

塵土滿青袍 塵土 青袍に滿つ

郵傳擁兩驛 郵傳 兩驛を擁し

簿書堆六曹 簿書 六曹に堆し

……

姚合における「小吏文學」

酬李少府曹長官舍見贈

李少府曹長の官舎に贈らるるに酬ゆ [0436]

低腰復斂手 腰を低くして復た手を斂め

心體不違安 心體安んずるに違あらず

一落風塵下 一たび風塵の下に落ち

方知爲吏難 方めて吏と爲るの難きを知る

公事與日長 公事 日と與に長じ

宦情隨歲闌 宦情 歲に隨ひて闌く

惆悵青袍袖 惆悵たり青袍の袖

藝香無半殘 藝香 半ばも殘ること無し

……

白居易の嘆きには、無能を強調して世間的價值觀を脱すると言った、自身を隱に引きつける構えた態度は見られない。一首目の自分を取り巻くものを確認していくかのような數字の多用、また二首目の小吏生活のままならなさに戸惑い嘆く表現は、日々の苦痛と悲哀をより率直に傳えている。

以上引用した作品は、表現に違いはあるものの、しがたない縣吏としての悲哀が基調となっている。このように、小吏の悲哀を描く作品は同時代に廣く存在していた。縣吏としての仕事は實際に激務だったのであろうし、加えて官位の低さ、中央にいないことなども慨嘆を引き起こす十分な要因となっただろう。その嘆きは隱逸の傳統や懶吏の形象と絡められて、宮仕えの士大夫獨特の絛情を生み出していく。これらの作品が持つ要素を大きく廣げて、また集中して描いたのが、姚合の「武功縣中作三十首」だと言いうことができる。この種の作品は、扱うテーマが小吏の悲哀や苦しみといった卑近なものであり、志を載せ

る文學としての表立った位置は獲得し難い。しかし、士大夫の普遍的な感情を映すものとして、當時廣く受け入れられたであろうこともまた、容易に想像がつく。明・康海『武功縣志』卷二には、宋代に武功縣令となった張及・王頤がこの「武功縣中作」の石刻を役所に置いたというエピソードを伝える。また北宋の王禹偁（九五四—一〇〇一）には以下のような作品がある。

成武縣作 成武縣の作

釋褐來成武 褐を釋きて成武に來たり

初官且自強 初めて官となりて且つ自ら強しとす

位卑松在澗 位卑くして松は澗に在り

俸薄葉經霜 俸薄くして葉は霜を經たり

雨菌生書案 雨菌 書案に生じ

飢禽啄印床 飢禽 印床を啄む

猶驚寫秋卷 猶ほ驚く 秋卷を寫して

槐砌落花黃 槐砌 落花 黃なるを

「釋褐」とあるように、作品は初めて官位を得て成武縣主簿に赴任した時のもの。詩形が共通する上、「位卑」「俸薄」「印床」などの語彙を用いて暗く侘びしい役所勤めを描く點が姚合詩と重なる。詩題や形式を見ても、この作品は「武功縣中作」を意識して作られたと考えられる。王禹偁には、他に佚詩として「官成武主簿作五首」(『山東通志』卷三五「藝文志・五言律詩」)がある。内容・形式から見て、引用した「成武縣作」はこの佚詩連作五首の一部分かと考えられる。以下に連作から其一と其二を引用する。

官成武主簿作 成武主簿に官たるの作

釋褐來成武 褐を釋きて成武に來たり

始知爲政難 始めて知る 政を爲すこと難きを

每簽逃戶狀 逃戶の狀に簽する每

羞作字人宦 人を字する宦と作るを羞づ

冷砌莓苔遍 冷砌 莓苔遍く

荒城草木寒 荒城 草木寒し

宦情銷已矣 宦情 銷えて已ぬるかな

時夢釣魚灘 時に夢む 釣魚の灘

釋褐來成武 褐を釋きて成武に來たり

徒勞自感傷 徒に勞れて自ら傷むに感ず

位卑松在澗 位卑くして松は澗に在り

俸薄葉經霜 俸薄くして葉は霜を經たり

逕擁寒莎綠 逕は擁す 寒莎の綠

門橫古木蒼 門は横たふ 古木の蒼

冠纓塵已滿 冠纓 塵 已に滿てるも

未敢濯滄浪 未だ敢えて滄浪に濯はず

「字人」「荒城」「寒莎」等の語彙が「武功縣中作」と重なる。其一、其二共に、職務に倦み縣の荒涼たる風景を描き、その苦痛から隱逸を志向するが果たせない、と言う流れである。内容から言って、「武功縣中作」を意識していることがますます明らかである。文字の異同も多く、扱いに慎重を要する作品ではあるが、後代にこのような詩が作られたと言う點は重要であり、姚合の絳情が廣く受け入れられた證左となろう。

但し、「官成武主簿作五首」には、自身を無能として官の世界と一線を畫すような強さがなく、あくまで侘びしさが投影された風景を綴

るのみである。また、其一の頷聯で庶民の現状を嘆き忸怩たる思いを抱く、と言うように、官吏としての責任感を詠う點が姚合詩と大きく異なるし、其二で徒勞感を言いつつそれでも官を辭さないと言う表現には、官人としての苦惱がより一層明確に表されている。下級官僚としての敘情が取捨されながら受け繼がれ、時代を経て輪郭を變える様が見られるようで興味深い。

おわりに

以後の姚合作品は、隱逸趣味は残しつつも、官に對するこれほど強い嫌惡感を表すことは少なくなる。この後萬年縣尉、監察御史、殿中侍御史……と順調な官歴を経る中で、このような作品を書く状況ではなくなったのだろう。つまり「武功縣中作」は、第一に（地方）縣吏と言う立場に據って構想された作品であり、その背景には、官と隱との間で揺れ動く士大夫文學の蓄積が存在した。作品には役所言葉の多用や具體的描寫など独自の工夫が見られ、小役人としての悲哀を様々に表して、小吏文學としてひとつの世界を形成している。また「青山」表現から明らかのように、作品は現實の状況を反映しながら「隱逸」を描くものであり、故に立場を同じくする下級官僚の共感を集めたと考えられる。

また最後に簡単に觸れておきたいのが白居易文學との關わりである。これまで見てきたように、「武功縣中作」と「閑居遣懷」は私生活の充實を細かな筆致で描き、そこには白居易閑適文學との共通性が存在する。しかし一方で、「武功縣中作」の私生活の楽しみは官という枠の中で實現を見るものであり、また「閑居遣懷」の穏やかな生活は、官のしがらみから解放された場所だからこそ成立するものだった。つまり、

姚合における「小吏文學」

「中隱」を唱えて仕官すら好意的に捉え、仕官と隱逸の矛盾を解消した白居易閑適文學のような構造は、官と隱を詠う姚合の連作詩の中には提示されていないのである。もちろん、「武功縣中作」では「厭うべき」縣吏という立場が作品の性格に決定的影響を與えている點は考慮せねばならない。しかしこのように見ると、表現、思想両面における白居易閑適文學の特殊性がよりはっきりと理解される。同時代に作られたこれらの作品を並べてみることで、文學の擔い手である當時の士大夫たちが、いかに官という現實や隱逸と言う理想を意識しつつ、独自の文學を作り出していたかが窺われるのである。

注

(1) 姚合の傳記と生卒年に關しては、各種史傳の他、最近洛陽で出土した墓誌（朱關田「姚合・盧綺夫婦墓誌題記」〔書法叢刊〕二〇〇九年一期）も参考にした。但し、この新出墓誌の眞偽に關しては慎重になるべきこと、特にその卒年に大きな問題があることが、既に松原朗「姚合の官歴と武功體」〔中國詩文論叢〕第二十八集、二〇〇九年十二月）に指摘されている。また、姚合が武功縣主簿の職に就いたのは元和十四年（八一九）のこととされる。「姚武功」の呼稱について、早くは『新唐書』卷一二四姚崇附姚合傳に、「合、元和中進士及第、調武功尉、善詩、世號姚武功者」との記述が見られる。「武功尉」は「武功主簿」の誤り。

(2) 「吏隱」思想の定義や變遷に關しては、赤井益久「中唐における「吏隱」について」〔國學院中國學會報〕三九、一九九三年、後に『中唐詩壇の研究』創文社、二〇〇四年に訂正加筆の上収録）、川合康三「宦遊と吏隱」（林田愼之助博士古稀記念論集編集委員會『中國讀書人の政治と文學』創文社、二〇〇二年）などを参照した。また、「吏隱」という

視點から姚合「武功縣中作三十首」を分析した先行研究に、蔣寅「『武功體』與『吏隱』主題的發展」(『揚州大學學報(人文社會科學版)』第四卷第三期、二〇〇〇年五月)がある。

(3) 文中に引用する姚合作品は、劉衍『姚合詩集校考』(岳麓書社、一九七七年)を底本とする。

(4) 明・康海『武功縣志』卷二には「姚合、硤石人、中書舍元之孫也。元和中進士及第、調武功尉。善詩、世號姚武功……含有武功縣居詩三十首、宋張及・王頤爲令、皆繼刻石置縣署中」とのエピソードの後、配列の異なる「武功縣中作」を引用する。また、明・毛晉『汲古閣書跋』に「余向藏宋治平王頤石刻武功縣中詩三十首、詮次不同」との記載もある。

(5) この作品について、川合康三「宦遊と吏隱」(前掲注2)は、仕官という現實上の要求を満たし、一方で隱逸という精神的希求をも充足させると言う「吏隱」の要素を、初めてはっきりと示したものと指摘される。

(6) 前掲注(2)。

(7) 官歴の初期に、首都近郊の上級縣の縣尉職に就くことが出世コースの一環であることは、夙に礪波護「唐代の縣尉」(『史林』五七卷五號、一九七四年、後に『唐代政治社會史研究』、同朋社、一九八六年收録)が指摘する所である。また、唐代の官僚の官途やその意義について詳細に論じる賴瑞和『唐代基層文官』・同『唐代中層文官』(臺灣聯經出版、二〇〇四・二〇〇八年。前者の大陸版は中華書局より二〇〇八年に出版)等の大型の研究が近年公刊された。これらの研究を紹介しつつ、武功縣主簿がエリートコースの入り口に當たる清官であることを指摘し、「武功縣中作」は不遇感を詠った作品とする従来の説に反駁を加えられるのが、松原朗「姚合の官歴と武功體」(前掲注1)である。松原氏は、このような觀點から武功體の性質を再考すべきとされ、姚合詩に見られる貧窮・邊鄙・老年・疾病・歸隱願望などが、姚合文學の初期から晩年に

到るまで一貫して見られることを指摘されている。

(8) 以下本論で引用する王建詩は、尹占華『王建詩集校注』(巴蜀書社、二〇〇六年)を底本とする。

(9) 『世說新語』夙惠に見える以下のエピソードに基づく。「晉明帝數歲、坐元帝膝上。有人從長安來、元帝問洛下消息、潸然流涕。明帝問何以致泣。具以東渡意告之。因問明帝、汝意謂長安何如日遠。答曰、日遠。不聞人從日邊來、居然可知。元帝異之。明日集群臣宴會、告以此意、更重問之。乃答曰、日近。元帝失色、曰、爾何故異昨日之言邪。答曰、舉目見日、不見長安。」

(10) 『王建詩集校注』(前掲注8)附録の「王建繫年考」には、科舉出身でも望族でもない王建が、長安近郊の縣丞になれた背景には、田弘正或いは裴度の工作があったと推測している(六一九頁)。

(11) 蔣寅氏先行研究(前掲注2)では、姚合「武功縣中作」の表現の特徴として、「吏隱生活の情景の具體化」「吏隱生活で特に詩趣に富んだ細部の發見」「懶吏と共に詩史としての像を描き、吏隱と詩をより密接に結びつけた」と指摘する。

(12) 中木愛「姚合の詩における閑適の要素―白居易との關連をめぐって―」(『中國中世文學研究』第五四號、二〇〇八年九月)は、「閑」であるはずの趣味の世界に對して、その没頭ぶりを「忙」と表した獨特の表現例としてこの作品を引用し、このような捉え方は白居易と共通すると指摘する。更に、姚合詩では「吏」の世界は忘却されたのではなく、戻りたくない現實としてはっきりと意識されている「點で白居易と異なる」とする。

(13) 張九齡「奉和聖製送十道採訪使及朝集使」詩に「三年一上計、萬國趨河洛(三年一たび上計し、萬國河洛に趨く)」とあるのが参考になる。

(14) 姚合詩集團の全容とその詩風を論じた松原朗「友を招く姚合」(『中國詩文論叢』第二十七集、二〇〇八年十二月)は、この作品を「爲政者の

主要な任務である民政と軍政を、嵐色と水聲という隠者の世界の中にしまい込もうとするもの」と指摘されている。

(15) 赤井益久「白居易と韋應物に見る「閑居」」『國學院雜誌』九四―八、一九九三年。のち『中唐詩壇の研究』、創文社、二〇〇四年収録。

(16) 「秋日閑居二首」「閑居晚夏」「閑居」「閑居遣興」「閑居」(以上『姚合詩集校考』卷五)「春日閑居」「早春閑居」(『同』卷六)。

(17) 以下、白居易作品の引用は謝思煒『白居易詩集校注』(中華書局、二〇〇六年)を底本とする。また白居易詩には花房英樹による四桁の作品番號を付した。

(18) この章での高適作品の引用は、劉開揚『高適詩集編年箋注』(中華書局、一九八一年)を底本とした。

(19) 『漢書』卷六七梅福傳「梅福字子真、九江壽春人也。少學長安、……補南昌尉。後去官歸壽春。……至元始中、王莽顯政、福一朝棄妻子、去九江、至今傳以爲仙」。

(20) 姚合詩と王建詩には、特に近體詩の作風において類似性があることが、尹占華『王建詩集校注』(前掲注8)「論王建的詩」に指摘されている。尹氏は李懷民『重訂中晚唐詩主客圖說』卷上の「武功縣中作」評「此等體與水部秋居、司馬原上詩一例、隨景觸興、無倫次、無章法、而自有天然妙趣」を引用し、王建「原上新居十三首」と「武功縣中作」が殊に似ていること、但し「原上新居」は職を辭して以降の作品であり、その點では姚合詩と根本的に異なることを指摘する。本論でも、姚合詩に繋がる要素を持つものとして王建詩を三首引用した。王建詩の姚合詩への影響に關しては、なお考察すべき問題が残されていると考えられる。

(21) 前掲注(4)。

(22) 『小畜集』卷七。

(23) 閑適と言う側面から姚合と白居易の共通性を詳細に分析したものとして、中木愛「姚合の詩における閑適の要素―白居易との關連をめぐって

姚合における「小吏文學」

―(前掲注12)がある。